図解住居学

1

住まいと生活

第二版

図解住居学編集委員会―編
岸本幸臣・吉田高子・後藤 久・渥美正子・
大野治代・中林 浩・高阪謙次・小倉育代

彰国社

はじめに

住まいは私たちにとって，欠くことのできない生活の「基地」となっている。ところが，具体的な住まいに目を向けてみると，実にさまざまな住まいが存在していることがわかる。現代の住まいは，間取りも実に多様化しているし，住宅の設備も年毎にハイグレード化している。インテリアを見ても，豪華に美しさを強調しているものもあれば，清楚で機能性を追求しているものもある。加えて，日常の住まいだけでなく，週末ハウスやリゾートハウスといったマルティハビテーション型の住まいも増えつつある。

現代社会での住まいは，このように実にさまざまであるが，もともと住まいは，それが立地している土地柄や，そこに住む人たちの生活ぶり，あるいはその住まいが存在した時代性や，そこに住む家族の社会階層などによって，古来から多様に存在してきたと言える。いつの時代に，どんな人達がどんな所で，どのような住まいを生活の基地としてきたのか。家族や社会条件によって，住まいにどのような変化が生じるのか。こうした視点に立って，住まいを多面的に学ぶことによって，住まいの正しい知識を身につけて欲しいと願っている。更に屋内の環境をどのように整えるのか，居住地はどんな環境でなければならないのかとか，住まいをどのように選べば良いのかなどを学ぶことも，快適な住生活を考える上で大切な課題だと考えている。

その意味では，本巻は「図解住居学シリーズ」全 6 巻の，水先案内人的な役割を担っていると言える。本書の内容を理解していただくことで，住まいについての全体像（パースペクティブ）は，あらかた理解していただけるという思いで，以下の各章を構成させていただいた。

第 1 章では，住まいと風土との関わりや家族との対応のあり方について，基本的な視点を述べている。

第 2 章では，住まいの変化を歴史的な視点から捉え，今日に至るまでの変遷過程を日本を事例に考察している。

第 3 章では，同じく歴史的な変化を外国（欧米）を事例に取り上げ，近代住宅誕生までの歩みを紹介している。

第 4 章では，家族や家庭生活の変化が住まいに与える影響を，高齢化や男女共同参画型社会を前提に捉えてみた。

第 5 章では，快適な室内を支える環境要素の考察と同時に，環境共生の視点から屋内環境の人工化を考えてみた。

第 6 章では，住まいが機能するために必要となる生活圏域について，居住地計画の視点から紹介している。

第 7 章では，超高齢社会における住宅需要や，住まいのデザインや，居住支援システムのあり方を展望している。

第 8 章では，住宅の構造的特性や政策上の種類を理解すると共に，その正しい選択方法について追求している。

第 9 章では，変化発展する社会にあって，次の時代に問われる住まいを考える視点と課題を整理している。

現代の私たちの生活は，本当に激しい変化の渦の中にあると言えよう。住まいを取り巻く諸条件はこれからも，家庭生活の側からも社会生活の側からも急速に動いてゆくと思われる。すなわち，家族形態の一層の多様化，高齢社会の更なる進化，環境共生のますますの重要化，情報社会の今まで以上の急速化などは，避けることのできない変化と思われる。本巻の編集にあたっては，そうした状況の中で私たち一人一人が，快適な「住まいと居住環境」を主体的に追求してゆくための判断力を啓発できるよう，9 つの章の構成を工夫したつもりである。本書を読まれてそこから学ばれた何かが，来るべき 21 世紀の新しい「住まい方」を意欲的に創造する際の「糧」となれば，執筆者一同にとって望外の幸せである。

平成 11 年 10 月　担当編集委員　岸本幸臣

第二版の刊行にあたって

『図解住居学 1　住まいと生活』を上梓して 10 年が経過した。この間に生じた本書の記載事項に関連する諸データの更新や，関わりのある制度・政策の改正，あるいはその後の研究進展の結果得られた新たな知見の出現などにより，本書の記述内容も適宜な改定の時期を迎えている。

加えて，私たちの住まいや住生活を取り巻く諸条件にも，執筆時とは異なる変化が生じている。家族関係に目をやれば，家族の個別化現象は更に拡大し，家庭内の住み方や暮らしに質的な変化をもたらしている。少子高齢化の進展も予想以上に急速で，高齢者の居住スタイルに新たな多様化が進展している。政策面においても，公共住宅政策がこれまでの建物供給から住生活支援に転換し，多様な視点に立つ居住政策の模索を始めている。また，高齢者福祉の領域には介護保険制度が導入されるなど，各種の政策においても理念的転換が行われている。更に，都市化・工業化がもたらす深刻な環境破壊に対して，自然環境への負担軽減を目指す住まい方や居住環境の具体的取組みが地球的規模で高まっている。

一方，経済面では，バブル経済崩壊の後，住宅供給戸数が大幅に縮小する中で，住宅の質的改善のあり方がこれまでのフロー重視型の視点から，ストック重視型への転換が問われ始めている。

この 10 年間に生じた，こうした住宅や住生活を取り巻く環境の変化を受けて，今回，本巻の内容を全面的に見直し，必要な記述内容の改訂を行うこととした。

改訂版が，今後の私たちの住まいや住生活のあり方を展望する際の適書として，初版同様に多くの方々にご愛用いただけることを心から期待したい。

平成 23 年 2 月　担当編集委員　岸本幸臣

目次

1 住まいとは何か

1.1 住まいと風土 10
1.2 住まいと公私の空間 12
1.3 住まいと起居様式 14
1.4 住まいの機能 16
1.5 住生活の都市化 18

2 日本の住まいの変遷

2.1 原始の住まい 22
2.2 古代の住まい 24
2.3 中世の住まい 26
2.4 近世の住まい 28
2.5 町と村の住まい/中世・近世民家 30
2.6 近代の住まい/明治・大正 32
2.7 現代の住まいへ 34

3 西洋の住まいの変遷

3.1 住居・集落・都市の発生/原始・古代 38
3.2 中庭型住宅の展開/古代 40
3.3 城から宮殿へ/中世・近世 42
3.4 都市型住宅の展開/中世・近世 44
3.5 新世界の住宅と近代住宅の誕生/近世・近代 46

4 住まいと家族生活

4.1 家族の変化と住要求 52
4.2 家族の多様化現象 54
4.3 男女共生社会における住まい 56
4.4 家事労働と住空間 58
4.5 子供と住まい 60
4.6 高齢者の家族生活 62

5 住まいの屋内環境

5.1 風の環境 66
5.2 熱の環境 68
5.3 音の環境 70
5.4 光の環境 72
5.5 色の環境 74
5.6 人工環境としての住まい 76

6 居住地の環境

6.1 居住地の成り立ち 80
6.2 オールドタウンとニュータウン 84
6.3 居住地計画の歴史 86
6.4 環境共生の住生活 90

7 高齢社会と住まい

7.1 高齢者居住の実情とニーズ 94
7.2 加齢とデザイン上の配慮 98
7.3 住宅デザインの実際 102
7.4 在宅福祉と住まい 106
7.5 高齢期の居住を支えるシステム 110

8 住宅の種類と選択

8.1 構造材料による分類 116
8.2 建築工法による分類 118
8.3 所有と供給による分類 120
8.4 形式による分類 122
8.5 さまざまな試み 124
8.6 住宅選択 126

9 家族と住生活の将来

9.1 家族と住生活の変化 132
9.2 公私室型平面の展望 134
9.3 公室の新しい動き 136
9.4 素足式椅子座の定着 138
9.5 新しい住み方 140

執筆分担（執筆順）

岸本幸臣　　1・9章
吉田高子　　2章
後藤　久　　3章
渥美正子　　4章
大野治代　　5章
中林　浩　　6章
高阪謙次　　7章
小倉育代　　8章

1 住まいとは何か

私たちのほとんどは，その生涯の大部分を住まいの中で送ることになる。その住まいが，質素か豪華かは別として，生涯住まいを経験することなく，生活を維持できる人などいない。

歴史的にみても，原始時代の粗末な住宅や現代の高性能な住宅など，時代によって質的違いはあるが，人類が住まいなしに生きた試しはないと言えよう。

住まいこそは，私たち人間が生きてゆくために，それも人として文化的に豊かに生きてゆくために，なくてはならない存在なのである。住まいがあってこそ人は成長し，人格を育み，家族関係を形成し，文化を身に付けてゆく。子供や高齢者も，住まいにいてこそ，安心した生活を享受することができる。その意味で住まいは，人間にとってきわめて重要な生活の基地ということができよう。

しかも，住まいを詳しく見てみると，さまざまな形態や使われ方が存在していることに気付くだろう。私たちの生活が多様であればあるほど，それを受け入れるための住まいも，ますます多様になってくる。また，人々の暮らす地域の特性によっても，住まいはおのおのに違った姿や形を見せてくれる。

この章では，住まいとは何かということを，生活や風土との関わりから考えてみようと思う。住まいというものを正しく理解する前提としての基礎的な理解を深めて欲しいと考えている。

第1節では「住まいと風土」の関わりについて，第2節では「住まいと公私の空間」の構成の仕方と問題点について，第3節では「住まいと起居様式」のわが国の特殊性と現代的課題について，第4節では「住まいの機能」を把握する視点について，第5節では「住生活の都市化」が持つ意味を扱っている。

1.1　住まいと風土

世界にはさまざま住まいが存在している。異国情緒豊かな住まいやデザインに心を奪われることも多い。

こうした住まいの多様性は，その地域に特有な風土との関わりの中で成立していることをよく理解しておくことが大切である。

1.1.1　住まいと風土

ある土地に固有な風土特性が，その土地に繁茂できる動植物相を決定するから，必然的に建築材料が規定されることになる。雨の少ない灼熱の土地では石や日干しレンガが使われる。しかし，雨の多い温暖な土地では，大量に茂る樹木が建築材料となることが多い。

1.1.2　建築材料とデザイン

住まいの建築材料が異なると，住宅の建て方（**工法**）や外観のデザインも違ったものになってくる。

石やレンガで住宅を造ると，**組積式工法**になるので，開口部は少なく，遮断性の強い外観を持った住宅ができる。木材で住宅を造ると，細長い部材を縦・横に組む**架構式工法**になるため，開放的で軽妙な雰囲気になるし，部材の縦横ラインを生かした外観デザインになることが多い。

1.1.3　風土と住み方

風土条件への対応によっても，住まいは，開放的な空間になる場合と，閉鎖的な空間になる場合がある。前者の住まいでは，家族は常にワンルーム的空間で日常の家庭生活や家族生活を送ることになる。逆に後者では，家族は各部屋で一人一人の生活を送る機会が多くなってくる。こうした住まい方の違いは，民族性としての家族意識の違いを形成する１つの背景要因にもなっている。

1.1.4　日本の風土特性

地球規模で見た場合，わが国の風土は他国に比べ，どのような特性があるのかを理解しておくことは，私たちの伝統的住まいや，これからの住まいのあり方を展望する際に大いに役立つことになる。

わが国は気候が穏やかで，雨や風に恵まれているが，天気は移ろいやすく，特に夏季の蒸し暑さは世界的に有名である。ただ，自然や四季の恵みはきわめて美しく，自然と一体となった生活を好むし，地震に対しても多少の揺れを吸収する構造を追求している。こうした風土の中で成立したのが，「**伝統的和風木造**」住宅である。簡素で開放的，**通風換気**を重んじ，水はけを良くするための三角屋根を原則としている。自然との一体感を得るため，屋内外の連続性を重視した縁側を備えている。

1.1.5　和風住宅の特性

わが国の風土特性を整理してみると，次の諸点があげられる。

①海洋性の気候（穏やかな気候）
②季節風の気候（雨と風が多い）
③夏季は高温多湿（夏は蒸し暑い）
④気候区が狭隘（天気の変化大）
⑤四季の相違が明瞭（自然が美しい）

こうした環境のもとで，和風木造住宅は雨仕舞いを配慮した**切妻屋根**で，通風を重視した開口部の多い，自然との一体感を大切にした簡素な住宅を造り上げてきた。従って和風木造住宅は，日本の風土に適した快適な住まいの典型例だとも言える。

穏やかな気候条件は，住まいを雨露をしのぐ程度の簡素な建物にすることを可能にしてきた。五風十雨と言われる雨や風の多い生活が，雨仕舞いを重視した屋根構造や通風性に富んだ開口部の多い住宅を成立させ，それが夏の蒸し暑さをしのぐ大切な条件ともなっている。四季の美しさは，住まいを自然から隔離するよりも，自然の中に同化させる建物として位置付ける住居観や生活観を育んだと言える。

図 1.1　木の家（ハワイ，撮影：取手　浩）[1)]

図 1.2　木と草の家（パプアニューギニア，撮影：八木幸二）[1)]

図 1.3　石の家（イタリア，撮影：竹内裕二）

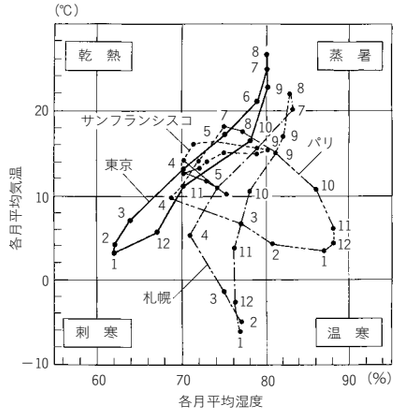
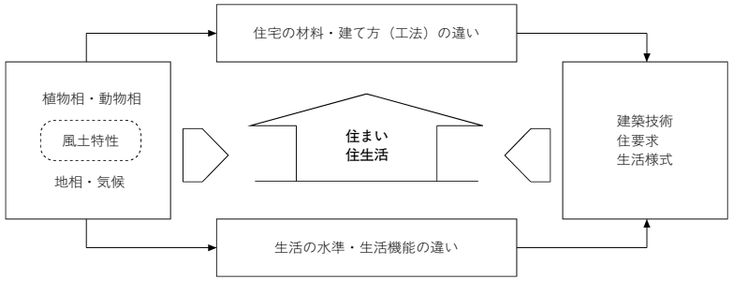


図 1.4　クリモグラフ

風土と住まいの規定関係



風土が規定する和風の住宅特性

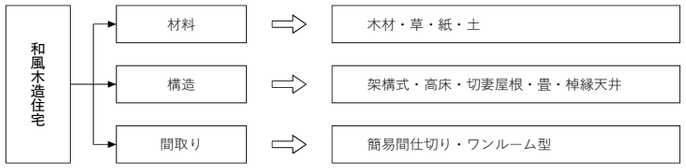


図 1.5　風土と住まいの関係

図 1.6　開放的な伝統和風住宅（柏原の家，設計：平野憲司，撮影：喜多　章）

2.7　現代の住まいへ

2.7.1　建築家の目指した住まい

堀口捨己は若狭邸（昭和14年）を西洋の近代建築運動に倣ってインターナショナルスタイル（国際様式）で建てた（図2.56）。鉄筋コンクリート造の屋上を体操場とし，居間は大きなワンルームで，上部は吹抜けである。

清家清は，森邸（昭和26年）をモダン住宅に襖，障子，畳を積極的に採用しフリースペースとし，また板敷き居間に縁台を続けるなど，和風の思想を確立した（図2.57）。

広瀬鎌二の自邸（SH-1）（昭和27年）は，その後の建築生産の工業化に先立つもので（図2.58），鉄骨造の住宅を試みた。鉄，ガラス，レンガ，コンクリートなどの特性を生かした細い鉄柱，広いガラス面などにより，日本住宅には珍しいモダンな空間を創造した。

丹下健三自邸（昭和28年）は木造ピロティ形式で2階に居住部分を設け，台所・便所・浴室など設備関係をコア（核）とし，畳や障子などによる伝統的美学を継承した開放的空間を創造した（図2.59）。

菊竹清訓の自邸・スカイハウス（昭和33年）は，4本の壁柱により支えられ，室内は設備ムーブネット（キッチン・バス）と中央の収納ムーブネットにより成長・変化に対応可能な等質空間とした（図2.60）。

吉阪隆正の自邸ヴィラ・クウクウ（昭和34年）は，ル・コルビュジエに影響を受け，**コンクリート打ち放し**の自由な形態を作り出している（図2.61）。

東孝光は，都市に住まうことにこだわり，その限られた敷地（20.5 m²）に自邸・塔の家（昭和41年）を建てた。それは6層の縦につながる住まいであり，ワンフロアに一機能を持たせる形とした（図2.62）。

図2.56　若狭邸（設計：堀口捨己）[1)]

図2.57　森邸
（設計：清家　清，撮影：平山忠治）

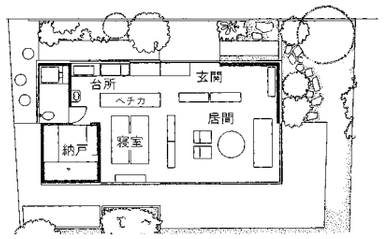


図2.58　SH-1，外観と平面図（設計：広瀬鎌二，撮影：平山忠治）

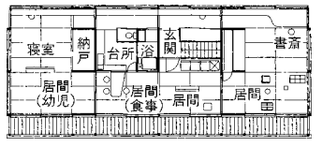


図2.59　自邸（設計：丹下健三，撮影：村沢文雄）

図2.60
スカイハウス，
外観と平面図[16)]
（設計：菊竹清訓）

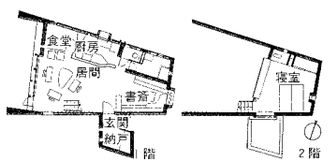


図2.61　ヴィラ・クウクウ，外観と平面図（設計：吉阪隆正，撮影：村沢文雄）

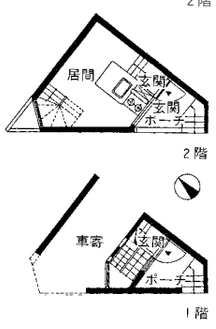


図2.62　塔の家，外観と平面図[16)]（設計：東孝光）

2.7.2　集合の住まい

都市に供給された近代の集合住宅は鉄筋コンクリート造の中層住宅であった（図2.63）。

その中で昭和26（1951）年に建設された公営住宅51C型の平面（図2.66）は，台所に食事空間を取り込み，ダイニングキッチンとしたものである。これは椅子式の食事方式により食事室を固定する一方，2寝室を確保するもので，公営住宅の標準設計として確立され食寝分離の住まい方を実現した。

住宅公団は昭和30(1955)年に発足し，都市部に計画的住宅地を開発し，そこに鉄筋コンクリート造の集合住宅の建設を行った（図2.65）。

昭和33（1958）年には，その住宅居住者は100万人に達し，公団住宅は「団地族」と呼ばれた若いホワイトカラーの核家族を容れる新しい住まいとなった。

公団住宅はDK型平面に浴室を備え（図2.67），台所にはステンレスの流し台を開発し，そこでの近代的生活はあこがれの的となった。

昭和35（1960）年頃から住居内には家庭電化の動きと共に電気洗濯機，電気冷蔵庫など設備が普及，充実されていった。

またテレビの普及は家族をテレビの前に引き寄せ，食事室以外に家族の集まる部屋を要求することにつながった。

これに対応して，昭和43（1968）年にはDK型に椅子式居間（リビング）を加えた3寝室の3 LDK平面の分譲型集合住宅が建設された（図2.68）。

従来のDK型では，寝室が昼間は居間に転用されたが，LDK型ではリビングの確立により，各自の寝室も確保された。

昭和25（1950）年発足の住宅金融公庫は住宅建設資金を低利，長期返済で融資することを目的とするもので，小住宅の持家建設や建て売り分譲を促進した。

その平面は，当初は中廊下型であったが，昭和45（1970）年頃から，リビングを取り入れた居間中心型の平面が普及し，公団住宅のLDK型の住まいが小住宅にも定着することになった。

表2.2は，戦後の住まいの移り変わりを年表にまとめたものである。

図2.63　法円坂団地（公営住宅）[17)]

図2.64　コープ・オリンピア
（民間マンション）[17)]

図2.65　千里ニュータウン（住宅公団）[17)]

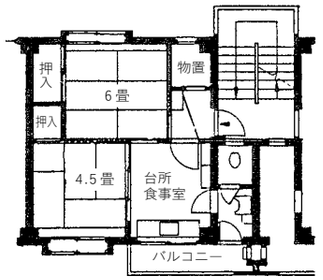


図2.66　公営住宅51C型平面図[17)]

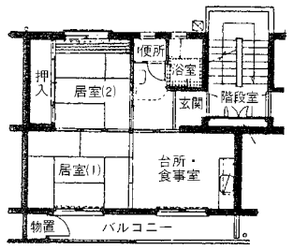


図2.67　公団住宅2 DK 平面図[17)]

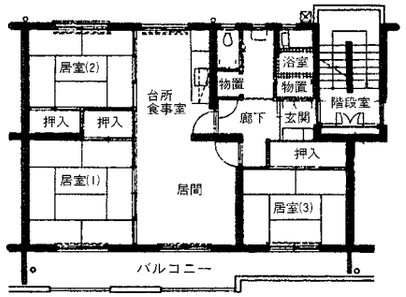


図2.68　公団分譲住宅3 LDK 平面図[17)]

表2.2　住まいの年表（戦後～現代）

年代		1950 昭和25年	1955 昭和30年	1960 昭和35年	1965 昭和40年	1970 昭和45年
住まいの動き	モダンリビング	立体最小限住宅 （1950・池辺陽）	SH-1 （1952・広瀬鎌二）	スカイハウス （1958・菊竹清訓）	塔の家 （1966・東孝光）	粟津邸 （1972・原広司）
		森邸 （1951・清家清）	丹下自邸 （1953・丹下健三）	ヴィラ・クウクウ （1959・吉阪隆正）	白の家 （1966・篠原一男）	矢野邸 （1972・磯崎新）
	集合住宅	公営住宅51C型	公団住宅2DK	コープ・オリンピア（1965）	公団分譲型3LDK	桜台コートビレッジ（1969）
	都市化	法円坂団地（1957）	香里団地（1958） （団地族）	千里ニュータウン（1962） （マンションブーム）	高蔵寺ニュータウン（1968） （第2次マンションブーム）	
	住宅問題		木造賃貸アパート	文化住宅	建売分譲住宅	
	プレハブ	プレモス（前川国男）	ミゼットハウス（大和ハウス）	積水ハウス（鉄骨系）	ミサワホーム（木質系）	ヘーベルハウス（コンクリート系）
住宅の設備	暖房	石油ストーブ大量生産	ガスストーブ	電気こたつ	住宅用セントラルヒーティング本格化	
	冷房	パッケージ型クーラー（国産）			クーラーの普及（3C時代・カラーTV・車）	
	台所(水道・ガス・電気)	都市水道整備 都市ガス普及	公団住宅ステンレス流し台 トースター 電気釜	太陽熱温水器 換気扇 電気冷蔵庫の普及	瞬間湯沸器	
	浴室・便所	洗濯機の普及		公団洋式便器採用	公団ホーロー浴槽採用	
	情報他	蛍光灯　TV放送開始	電話の普及	住宅用アルミサッシ		

7.3　住宅デザインの実際

7.3.1　間取り

高齢者を含む世帯の世帯構成は，図 7.2 に見たように，単身（単独），高齢者夫婦（のみ），あるいは若い世帯との同居（3 世代世帯）などと分かれる。間取りの考え方も，この世帯構成によって変わってくる。単身の場合は，居間，寝室，食堂などが 1 つの部屋になった，いわゆるワンルーム形式が，体が不自由になった場合などに便利であると言われている。しかしそれとて，面積が小さいと，生活が混乱するので，一定の面積が必要である。

イギリスの**シェルタード・ハウジング**やスウェーデンのサービス・ハウスなど，福祉先進国では**ケア付き高齢者住宅**が，公営を中心として大量に供給されている。その単身向け住戸は 1 戸当たり 30〜50 m²程度である。デンマークでは単身と夫婦を区別せず，約 50 m²の住宅が供給されることが多い（図 7.27）。

夫婦のみの世帯の場合は，寝室は他と併用せず独自の部屋をとることが，生活の混乱を避ける意味からも必要である。

2 世帯（3 世代）が同居する世帯は，減少しつつあるが，しばらくは基本的な世帯構成として残るであろう。この場合，2 つの世帯がどの部屋を共有するかによって，互いの関係が規定される（図 7.28）。

「玄関出会い型」は，互いが最も分離しており独自の生活が営める。隣居に近い。

「D・K 分離型」は，老若の世帯間で，食事の場面が，時刻・時間や好みなどが，最も異なることを配慮したものである。同居といえども，できればこの程度までの分離は確保したい。

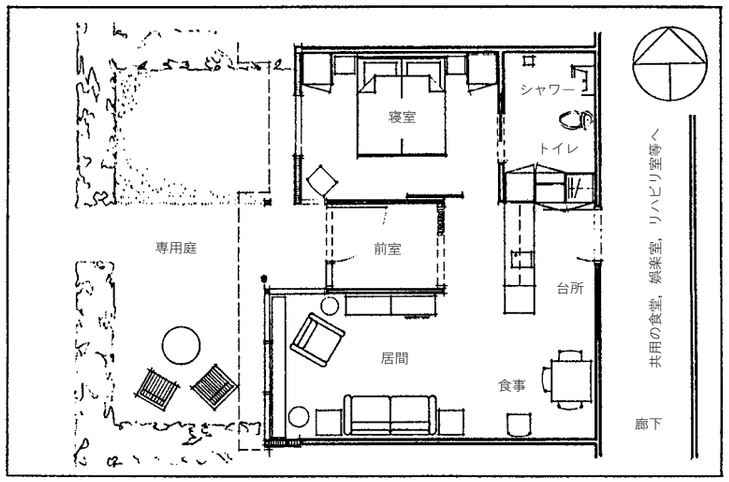


図 7.27　1・2 人向け高齢者住戸（デンマーク，ミュラゴーン高齢者住宅，設計・図面：エリック・エイレル）

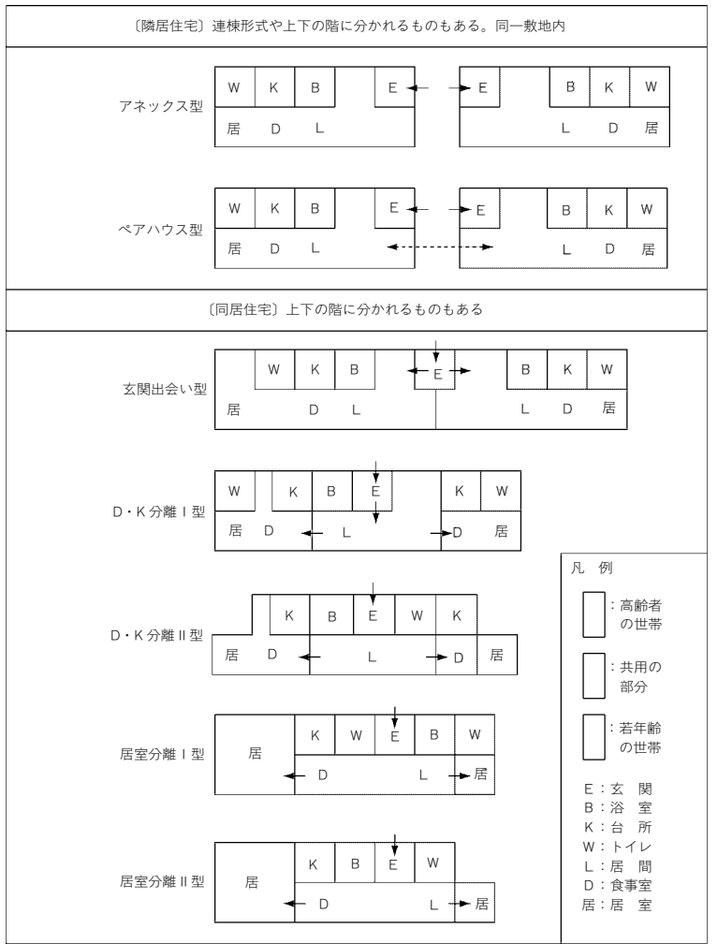


図 7.28　隣居・同居のタイプ例

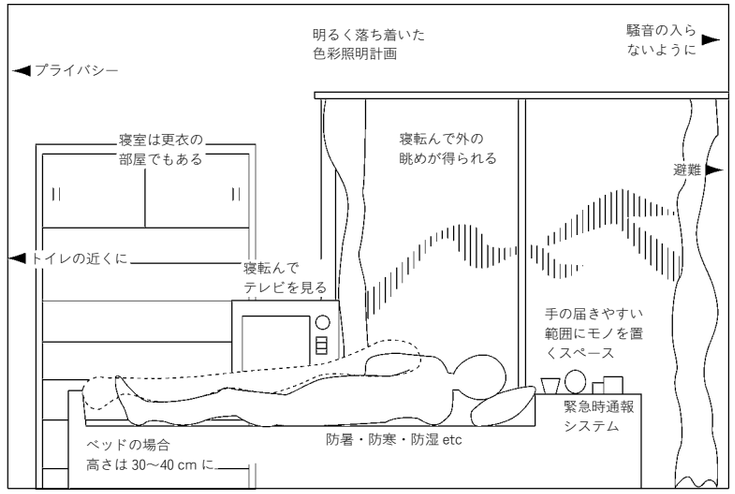


図 7.29　寝室の配慮

図 7.30　単身高齢者（男）**のベッドまわり**（図 7.27 の住戸）

図 7.31　寝室から，にわとりと緑（特養あいちたいようの杜）

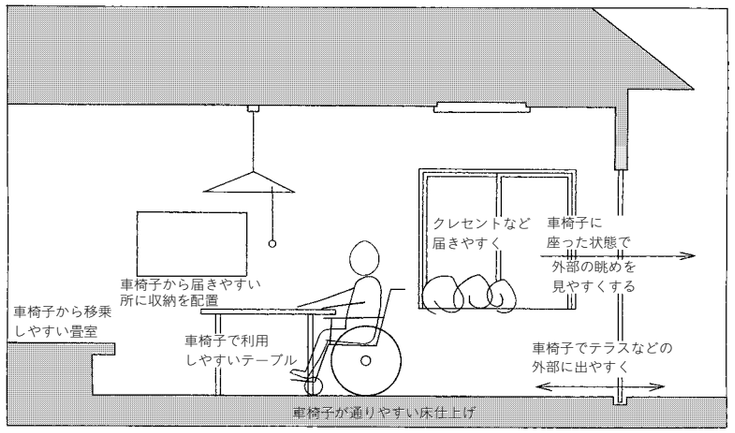


図 7.32　車椅子利用者への配慮

図 7.33　窓辺に彩りのある居間（スウェーデン，ソルバーグ・ハーバ，サービスハウス）

図 7.34　車椅子に座っていても窓からの眺めが楽しめる居間（図 7.27 の住戸）

「居室分離型」は，高齢者の専用居室や専用トイレのみが確保された形式である。これは，ともすると世代間，世帯間の摩擦や葛藤が発生しやすい形式である。

7.3.2　寝室

高齢者は，夜の就寝ばかりでなく，居間で横になって休息したり，昼寝したりすることが多い。また夜間，わずかなことで目を覚ましてしまう高齢者も多い。したがってその就寝スペースの環境には，かなり気を配る必要がある。

夜，トイレに行くことが多くなるので，それが寝室の近くにあり，そこへの照明を確保しやすくする。

高齢者は枕元に種々のモノを集める傾向がある。これは，身体の調子が悪い時など，起きることなく，枕元に用意したお茶を飲んだり，ラジオを聞いたり，薬を飲んだりするためである。

また，気分の悪い時などに，他の人に知らせるための，なんらかの通報システムを用意しておくことが必要である。

7.3.3　居間・食堂

高齢者は，ときには持て余すほどの余暇時間を，家の中で過ごすことが多い。そこでは，庭の手入れなどのほかは，居間や食堂が主要な居場所となる。したがってこの場所が，居心地の良い，安全で充実した空間であることが非常に重要である。

趣味や仕事がある場合には，そのための空間的な仕掛けが必要である。一般に，高齢者はテレビ視聴に多くの時間を当てている。従って，テレビの見やすい居間であることが求められる。

高齢期は，立ったり座ったりの動作が困難になるので，椅子などの姿勢家具には，ことのほか気を配らなければならない。

更には，住宅内に，在宅医療や**リハビリテーション**のための器具・道